龍造寺胤栄の太宰府亡命

太宰府の文華
～公文書館だより㉓～

戦国時代も後半に入った天文16年（1547）9月、筑前国の守護大内義隆は早良郡戸栗・重富（現福岡市早良区～西区）の両所を、太宰府天満宮の社家の満盛院に返還しました。これは先に大内氏がこの地に半済（寺社の領地などで、年貢あるいは土地の半分を取り上げて別人に与えること）を実施し、半分を龍造寺胤栄に与えていたものです。領主である満盛院の院主快闇が、大内氏に返してくれるよう訴えを起こしており、これが聞き入れられたのでした。

ところで龍造寺胤栄という人物は、肥前国佐賀郡の龍造寺村（現佐賀県佐賀市）に本拠を置く龍造寺氏の当主で、後に戦国大名に成長した龍造寺隆信の義理の父に当たります。当時、龍造寺氏は大内氏に従い、少弐氏とは敵対するようになっていました。後世の編纂資料による限りでは、同13年（1544）11月に少弐冬尚の重臣馬場頼周らの謀略によって、龍造寺一族は相次いで戦死し、同14年（1545）正月には少弐勢に攻められ本拠を追われて筑後国に退去したようです。その後、4月には本拠を奪回したとされていますが、同15年（1546）正月に再び少弐冬尚らが龍造寺氏を攻撃し、胤栄は敗走して筑前国に逃れました。この時の亡命先は、太宰府と言われています。

この一連の動きのうち、同時代に書かれた確実な史料によって裏付けられる部分は非常に少ないものの、胤栄が大内氏を頼って筑前に流れてきたことは確認できます。ただ滞在していた場所が太宰府かどうかは定かではありません。昨年の本誌10月号（No.1001）で、大内氏が他国から逃れてきた味方の人々を保護し、たびたび満盛院領の戸栗・重富において領地を与えていた話をご紹介したのに続き、ここでも義隆は同様に領地を与えたのでした。それが同16年9月以前に胤栄が肥前に復帰を果たしたため、満盛院の訴えにより返還されたのです。満盛院にとっては受難の繰り返しですが、亡命してきた人々にとっては、当面の生活を支える上で大いに助かったのではないでしょうか。

【バックナンバーはこちら】
ページID7241

太宰府市公文書館　大塚　俊司